

苦参 SOPHORAE RADIX

(英名 Sophora root)

〔基原〕 1) 2) 3) 4) 5) 7) 9) 13) 14) 17) 18) 19) 20) 21) 22) 23) 25) 26) 28)

本品はマメ科(*Leguminosae*)のクララ *Sophora flavescens* Aiton の根で、しばしば周皮を除いたものである。(本邦産、中国産のもの共に *Sophora flavescens* Aiton (= *Sophora angustifolia* Siebold et Zuccarini) であるとしている。周皮を除かないものも広く使われる。)

Sophora flavescens Aiton をヒロハクララとし、日本産のクララと別種とする説もある。²⁾

〔名前の由来〕 1) 2) 7) 12) 13) 20)

lightyellow sophora root. クララの和名は本品を服用したとき、軽度の中毒症状としてめまいを起こすところよりでた呼称であり、眩草(クララクサ)が省略されたものである。原植物の古名をマトリグサと呼ぶ。李時珍は「苦とは味から、参とは効能から名付けたものだ」という。

(苦参は根の形態が人参に似ているが苦味を有するところからこの名前がある。^{16) 17)})

一名を水槐または苦識ともいう。

〔来歴〕 1) 3) 12) 13)

神農本草経の中品に収録され、その薬能は「心腹結気、癥瘕、積聚、黄疸、尿後に余瀝あるものを主どり、云々」と記載されている。現在我が国では漢薬としているが、生薬製剤の原料生薬でもある。

〔性状〕 1) 3)

本品は円柱形を呈し、長さ5~20cm、径2~3cm、外面は暗褐色~黄褐色で、著しい縦じわがあり、また横長の皮目を認める。周皮を除いたものは黄白色で、表面は多少繊維性である。横切面は淡黄褐色、皮部の厚さ0.1~0.2cm、形成層付近はやや暗色を帯び、木部との間にすき間を生じるものがある。

本品はわずかににおいがあり、味は極めて苦く、残留性である。

〔確認試験〕 1) 3) 21)

本品の粉末0.5gに希酢酸10mLを加え、時々振り混ぜながら水浴上で3分間加熱し、冷後、ろ過する。ろ液5mLにドラーゲンドルフ試液2滴を加えるとき、直ちにだいたい黄色の沈殿を生じる。(matrineなどのアルカロイド沈殿反応)

〔純度試験〕 1)

(1) 茎 本品は茎10.0%以上を含まない。

(2)異物 本品は茎以外の異物1.0%以上を含まない。

「灰分」¹⁾

6.0%以下（根頭部、茎などを含む調製不十分のものは灰分が多く、輸入品の一部にこの傾向が見られる。）

「酸不溶性灰分」¹⁾

1.5%以下

「産地」^{1) 2) 4) 7) 13) 14) 21) 22)}

日本では長野県、群馬県、奈良県、富山県、徳島県などに多少の産出があるが、主として中国、韓国から輸入される。中国では河北省で最も多く採集される。その他、山西省、湖北省、河南省など。輸入量は年間約30トン。

東医研は、ツムラより貴州省、陝西省のもの。

ツムラ刻み生薬パンフレットより²⁸⁾

原体：円柱形の根。通常周皮は除かれており、外面は黄白色で、質は堅く折りにくい。苦参に特異なわずかなにおいがあり、味は極めて苦く残留性。

製品：根を切裁したもの。切面は淡黄白色で、繊維性。刻みの状態でも、苦参に特異なわずかなにおいと苦味を保つ。

貯法：本品は天然物（生薬）の性質上、吸湿性があり、保存法が悪いと変質し易いので、低温で通気性の良い場所に保存して下さい。

「生産」^{1) 7) 25)}

花期～結果期（7～9月）に採根し水洗いして天日乾燥し、支根を切除してその周皮をけずり去ったものを市場にだす。また、皮付きのもの、輪切りにしたものもある。

「品質・選品」

- ・長大なる根にして種々に分岐し、上部に残莖を有し、諸々に腐朽の跡あり。外皮は帯黄褐色又は汚褐色内部は白色なり。特異の微臭あり。味は苦くして不快なり。⁸⁾
- ・外皮黄褐色、内部黄白色の苦味の強い、長くて節のないものがよろしい。無暗に肥大のものや、あまり細かいものや色相の濃いものなどはいけませぬ。苦辛は元来苦参と書いたものでありますが、現在は苦辛^{8) 15)}でなければ通じかねます。¹⁵⁾

「成分」^{1) 2) 4) 5) 7) 13) 14) 17) 18) 20) 21) 22) 25) 28)}

キノリチジンアルカロイド成分として *matrine* が主で約1～2%、その他副成分として *oxymatrine*, *sophoranol*, *anagryne*, *isomatrine*, *methylcytisine*, *laptifoline*, *sophocarpine*, *sophoramine*, *baptifoline* などを含み、またフラボノイドとして *xanthohumol*, *isoxanthohumol*, *kurarinone*, *norkurarinone*, *kuraridin*, *kuraridinol*, *kurarinol*, *neokurarinol*, *isokurarinone*, *formononetin*, *trifolirhizin*, *noranhydroicaritin*, *8-isopentenyl-rhamnocitrin*, などを含み、ステロールとして β -*sitosterol*, *stigmaterol*, *campesterol* などを含み、また、サポニン類としてアグリコンに *soyasapogenol B* を有する *sophora-flavoside I* が

soyasaponin I とともに分離されている。

「現代薬理」

● 血圧降下作用：^{1) 5) 7) 14) 21) 22)}

matrine は、血管運動中枢の抑制により、血圧降下作用を示し、vexibinol と kurarinone は Ca^{2+} 拮抗作用によって血管拡張作用を示す。oxymatrine も麻酔ラットにおいて副交感神経を介して血圧降下、徐脈抑制作用を示す。

● 抗消化性潰瘍作用：^{1) 3) 5) 7) 14) 17) 21) 22)}

メタノールエキス及び matrine、oxymatrine は、経口投与で拘束水浸ストレス潰瘍、幽門結紮潰瘍などに対し予防を示した。また、幽門結紮ラットにおいてヒスタミン、ガストリンなどによる胃酸分泌亢進も抑制した。oxymatrine、matrine は十二指腸内、腹腔内、または静脈内投与でストレス付加による胃運動を抑制した。HCl/エタノールによって誘発された胃潰瘍を vexibinol は抑制した。vexibinol には粘膜保護作用と胃酸分泌抑制作用が認められた。

● 中枢抑制作用：^{1) 5) 7) 20) 21)}

oxymatrine、matrine にはペントバルビタールによる催眠の延長、酢酸 writhing 抑制作用がある。また oxymatrine は経口投与でメタンフェタミンによる運動亢進を抑制した。マウスへの oxymatrine、matrine の経口投与により、正常体温の降下がみられる。

● ホスフォジエステラーゼ(PDE)に対する阻害作用：⁵⁾

メタノールエキスは、PDE 活性に対し、高い阻害作用を示した。

● 肝障害抑制作用：^{3) 5)}

メタノールエキスは、マウスの CCl₄肝障害を著明に抑制した。

● 止血作用：⁵⁾

マウスの出血時間を苦参は抑制した。その活性成分の一つは quercetin であった。

● 免疫賦活作用：⁵⁾

熱水抽出エキスは、インターフェロン誘起作用を示した。その他、マンノースに糖特異性を示すレクチン(SAM)はマウス T 細胞に対しマイトジェン活性を示した。

● 抗面皰作用：⁵⁾

メス rhino hairless mouse の皮膚に水製エキスを塗布したところ、closed comedo の開口が認められ、comedo profile(d/D)に対し有効性を示した。

● メタノールエキスはラット十二指腸内投与で利胆作用を示す。¹⁾

● oxymatrine、matrine には神経筋標本におけるグルタミン酸遮断作用などが報告されている。^{1) 3) 17) 20)}

● matrine には抗原虫作用、解熱作用、末梢血管収縮、摘出腸管及び子宮収縮、運動神経末梢抑制作用、胃底切片収縮作用がある。^{1) 3) 14) 22)}

(matrine はカエルの摘出心臓に対して緊張ののちに静止を引き起こし、ウサギの摘出腸管、子宮、心臓にも同様の作用を示した。この作用は平滑筋への直接作用によるとされる。²²⁾)

● matrine,allomatrine,sophoridine,sophoramine には陽性変力作用が報告されている。^{1) 17) 22)}

- フラボノイドはマウスのクロロホルムによる心室細動、ウサギのクロロホルム-アドレナリンによる不整脈、ラットのアコニチンによる不整脈を減少させる。^{1) 2 2)}
- kurarinone など7種のフラボノイドは抗菌作用、l-maackiain は抗皮膚糸状菌作用、kurarinone は抗真菌作用。^{1) 1 7) 2 1)}
- kurarinone, kushenol A, kuraridin は環状 AMP ホスホジエステラーゼ阻害作用を示す。^{1) 7) 2 2)}
- 酢酸エチル及びこのエキスより分離した vexibinol, kurarinone はラット摘出胸部動脈標本において KCl とノルエピネフリンにより起こされる収縮を抑制し、この作用機序として電位依存性 Ca²⁺流入を抑制することが考えられた。¹⁾
- matrine については古く中毒量投与によりカエル、ラット、ウサギなどの実験動物で随意運動を障害し、脊髄反射を亢進、痙攣、ついで麻痺を生じ、運動神経末端に対してクラーレ様麻痺作用による呼吸運動停止をもたらすとの報告がある。^{1 4) 1 7) 2 2)}
- matrine の抗腫瘍性の報告がある。matrine はエールリツヒ腹水癌に、oxymatrine は salcoma-180 固形癌に強力な抗癌活性を示し、sophocarpine も salcoma-180、U14、Lio 1、L615、などに対する抑制作用を示した。^{2 2)}
- oxymatrine はラットへの経口投与によって抗喘息作用を示した。抗潰瘍作用と同様に静脈内投与では効力を発揮せず、消化管内で matrine に変換されると考えられている。^{2 2)}
- sophocarpine にも鎮咳作用が報告されており、おそらくは中枢神経β-受容体を介する作用であろうと考えられている。^{2 2)}
- matrine および oxymatrine の毒性はマウスに対する LD50 値が経口投与で 370 および 587mg/kg、腹腔内投与で 150 および 830mg/kg、静脈内投与で 70 および 150mg/kg とされている。(山崎幹夫他未発表データ)^{2 2)}
- matrine 致死量はウサギで 233mg/kg 以上、マウスで 148mg/kg 以上、イヌで 300mg/kg と推定される。^{1 4)}

「臨床応用・用途」

- ①現在の需要の多くは家庭原料で、苦味健胃、解熱、止瀉、消炎利尿（熱のために利尿が悪くなったとき^{2 0)}）の効があり、黄疸を治し、皮膚病（寄生性皮膚疾患：たむし、水虫など）、腫物に用いる。^{2) 3) 7) 9) 13) 14) 16) 20) 21) 22) 23) 24)}
- ②熱症の湿疹、皮膚の化膿症、女性の陰部搔痒に内服・外用することが多いが、10～30%煎液で外洗する。^{9) 19) 2 2) 2 5)}
- ③配合剤（止瀉薬）の原料とする。1日最大分量は3g。^{1) 1 7)}
- ④農作物の害虫駆除、家畜の皮膚病の殺菌に使用。^{2) 3) 7) 2 4)}
- ⑤中国では細菌性腸炎や肺炎、扁桃炎などに苦参注射液、急性肝炎などに苦参の粉末カプセル、白癬症に苦参エキスの配合された軟膏などが応用されている。^{2 0)}

「古典的薬効・薬能」

薬味：苦^{2) 3) 5) 7) 8) 9) 12) 13) 17) 19) 20) 22) 24) 25) 28)}

薬性：寒^{2) 3) 5) 7) 8) 9) 12) 13) 17) 19) 20) 22) 24) 25) 28)}

帰経：心・肝・小腸・大腸・胃経^{7) 9) 19) 20) 25)} 脾・腎¹⁹⁾ 膀胱²⁰⁾

薬能：清熱燥湿・祛風殺虫^{2) 3) 4) 5) 7) 9) 19) 20) 28)}

(湿を燥かし、火を瀉し、熱を除き、風を去り、虫を殺し、痒みを去る。²⁴⁾)

『神農本草経』：苦参、一名は水槐、一名は苦識、味は苦・寒。山谷に生ず。心腹・結氣・癥瘕・積聚・黄疸・溺に余瀝あるものを治し、水を逐い、癰腫を除き、中を補い、目を明らかにし、涙を止む。¹²⁾

『意釈神農本草経』：主として、心腹すなわち、胸や腹の部位の病や、邪気が一カ所に結集した結氣の病や、腹中にしこりがある、それが一カ所に固定した癥とか、それが移動性の瘕の、癥瘕の病や、寒気の積み重なりによって生じた痛みが一カ所に固定する癰病、および、寒気の集まりによって生じた痛みがあちこちに移動する聚病や、体内に熱がこもってからだ中が黄色になる黄疸の病や、溺に余瀝が有る、つまり、排尿した時にすっかり出してしまうので残尿したり、また、残尿感があったりする病をなおすことができる。また、からだ中の余分な水を逐い去り、たちの悪いおできで比較的根が浅い癰や、それなどの腫れをとり除き、中すなわち内臓の機能を補い、目が明らかにみえるようにし、涙の出すぎるのを止める作用がある。¹³⁾

『訂補薬性提要』：苦、寒、湿を燥し、火を瀉し、風を祛り、蟲を殺す。¹¹⁾

『古方薬品考』：熱を清し、煩を除き、壅を排く。¹¹⁾

『古方薬議続録』：苦寒、湿を去り、小便を利し、蝕を止め、熱を清するを主治す。¹¹⁾

『名医別録』：肝胆の気を養い、五蔵を安んじ、志を定め、精を益し、九竅を利し、伏熱、腸澼を除き、渴を止め、酒を醒し、小便の黄赤、悪瘡、下部の隠を治し、胃気を平にする。人をして食を嗜み、身を軽くする。²⁷⁾

〔赤松・和漢薬より〕^{2) 5) 28)}…逐水、補中、明目、止涙、安五臓、益精、止渴、平胃気、定志、軽身、利九竅、醒酒、養肝胆気、殺虫、消毒、排膿、散風

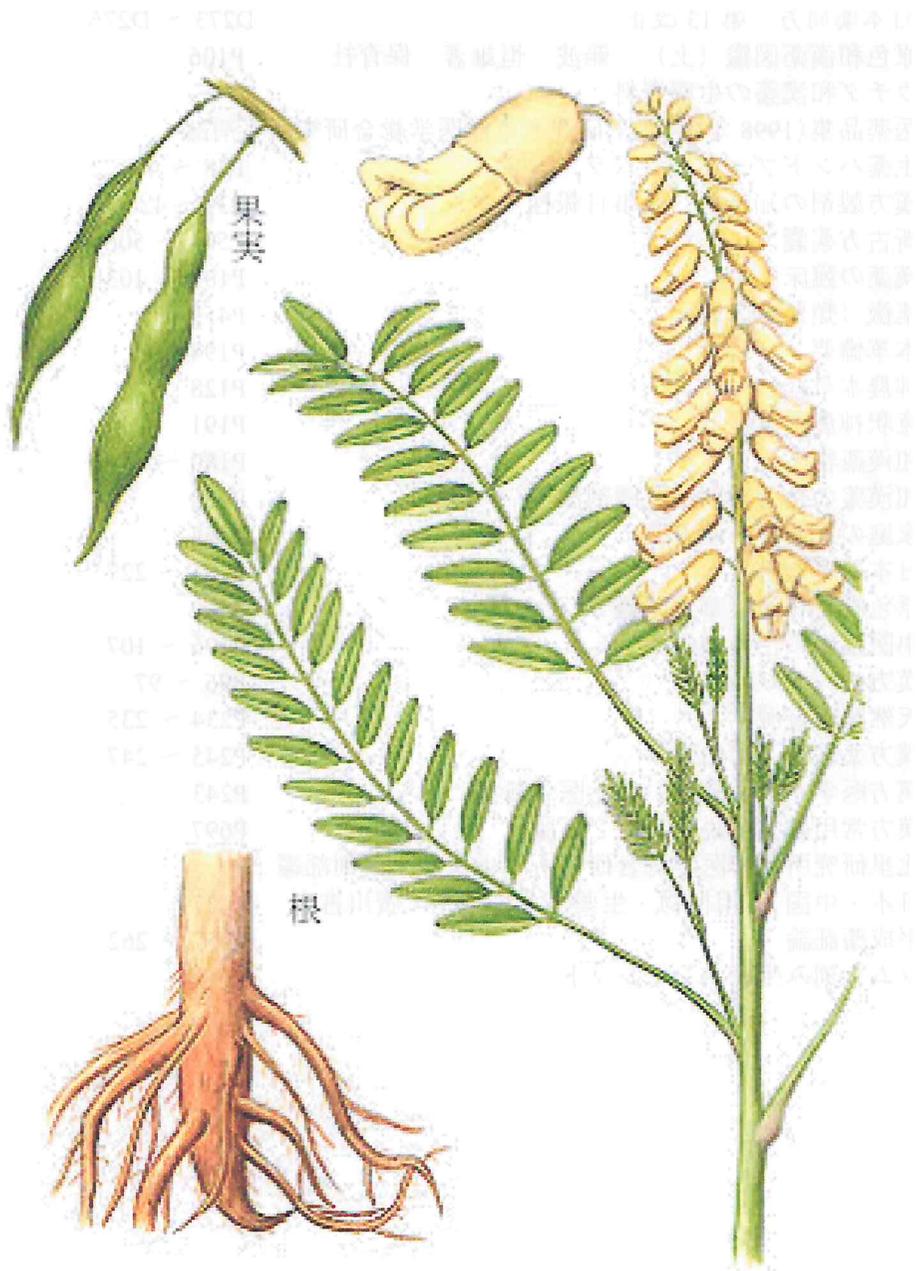
徐洄溪は「苦参は専ら心経の火を治し、その功用は黄連と類似している。ただし黄連は心臓の火に用い、その氣味は清であるが、苦参は心腑小腸の火に用い、その氣味は渴である。」²⁾

「その他」

- matrine には nicotine 様の作用があり、家畜などの寄生性皮膚疾患にその煎剤を外用する。^{2) 20)}
- matrine を家兎に注射すると中枢神経麻痺を起こし同時に痙攣を発生し、遂に呼吸停止をきたす。²⁾
- 苦参の煎液 8 ~ 30%濃度で各種の皮膚真菌の発育を抑制する。^{2) 9) 14) 17) 20)}
- 細菌性下痢・腸炎には、苦参9g・木香9g・甘草2.5gを煎じて服用する。⁹⁾
- 苦参に蛇床子を合わせると殺虫、止痒効果が強まる。¹⁴⁾
- 使用上の注意として、苦寒の性質が強いので、肝腎陰虚でも熱象がないときには使用すべきでない。⁹⁾
- 副作用としてよだれ、呼吸促迫、痙攣に注意する。²⁵⁾
(マトリンや種子のシチシンなどのアルカロイドは有毒であり、誤飲すれば痙攣などが発現する。クララの茎や葉の煎液は農業用の殺虫剤となる。^{16) 17) 18) 20)})

(参考文献)

- 1) 日本薬局方 第13改正 D273 ~ D276
- 2) 原色和漢薬図鑑(上) 難波 恒雄著 保育社 P106
- 3) ウチダ和漢薬の生薬資料
- 4) 医薬品集(1998年版)北里研究所東洋医学総合研究所薬剤部
- 5) 生薬ハンドブック ツムラ P48 ~ 49
- 7) 漢方製剤の知識Ⅹ 薬事日報社 ツムラ P39 ~ 42
- 8) 新古方薬囊 P504 ~ 506
- 9) 漢薬の臨床応用 P102 ~ 103
- 10) 薬徴(類聚方広義) P457
- 11) 本草備要 P194
- 12) 神農本草経 P128
- 13) 意积神農本草経 P191
- 14) 和漢薬物学 P180 ~ 181
- 15) 和漢薬の良否鑑別法及調剤法 P158
- 16) 家庭の民間薬・漢方薬 P257
- 17) 日本薬草全書 P225 ~ 227
- 18) 原色牧野和漢薬草大図鑑 P229
- 19) 中医臨床のための中薬学 P106 ~ 107
- 20) 漢方のくすりの辞典 P96 ~ 97
- 21) 天然医薬資源学 P234 ~ 235
- 22) 漢方薬理学 南山堂 P245 ~ 247
- 23) 漢方医学 大塚敬節 創元医学新書 P243
- 24) 漢方常用処方解説(新訂23版) P697
- 25) 北里研究所東洋医学総合研究所 生薬集 薬剤部編
- 26) 日本・中国 薬用植物・生薬 大村重光 廣川書店 P127
- 27) 平成薬証論 P257 ~ 262
- 28) ツムラ刻み生薬パンフレット



295. クララ (改改1264)

平成12年11月21日

今田屋内科

生薬資料

苦参

(附・かゆみに効く生薬について)

(株) ウチダ和漢薬

苦 参

『神農本草經』の中品に収載されている。

クララの和名は本品を服用したとき、軽度の中毒症状としてめまいを起こすところよりでた呼称であり、原植物の古名をマトリグサと呼ぶ。

李時珍は「苦とは味から、参とは効能から名付けたものだ」といつている。

<基 源>

- ・本品はクララ *Sophora flavescens* Aiton (*Leguminosae*)の根で、しばしば周皮を除いたものである。 (第十三改正日本薬局方)

<産 地>

- ・日本では長野県などに多少の産出があるが、主として中国、韓国から輸入される。中国では河北省で最も多く採集される。輸入量は年間約 30 トン。

(第十三改正日本薬局方)

<選 品>

- ・長く曲折が少なく、皮が黄褐色、内面黄白色で苦味が強いものを良品とし、肥大したもの、あまりに細いもの、色の濃いものなどは劣品とされる。

<成 分>

- ・アルカロイド成分としてマトリンが主で約 1~2%、その他副成分としてオキシマトリン、ソフォラノール、アナギリン、イソマトリンなどを含み、またフラボノイド、サポニンなどを含む。 (第十三改正日本薬局方)

<薬 理>

- ・マトリンにはニコチン様の作用があり、家畜等の寄生性皮膚疾患にその煎剤を外用する。
- ・マトリンを家兎に注射すると中枢神経麻痺を起こし同時に痙攣を発生し、遂に呼吸停止をきたす。
- ・苦参の煎液 8%濃度で各種の皮膚真菌の発育を抑制する。 (和漢薬百科図鑑)

<性 味>

中薬大辞典：苦、寒。

神農本草経：味は苦、寒。

<帰 経>

中薬大辞典：肝、腎、大腸、小腸の経に入る。

<薬効と主治>

- ・清熱する、湿を燥かす、殺虫する、の効能がある。熱毒血痢、腸風下血、黄疸、赤白帯下、小児肺炎、癩積、急性扁桃炎、痔ろう、脱肛、皮膚搔痒、疥癬悪瘡、陰瘡湿痒、癰癤、やけどを治す。 (中薬大辞典)

<臨床応用>

湿疹・皮膚化膿症・女性の陰部搔痒などの皮膚病に対し、主として外用する。

- ・苦参 30g の煎汁で患部を洗浄する。
- ・また細菌性下痢・腸炎には、苦参 9g・木香 9g・甘草 2.5g を煎じて服用する。

*一般に苦参は洗浄用か丸薬に使用し、湯剤には用いない方がよい。

(漢薬の臨床応用)

<用 量>

- ・3~15g。

(漢薬の臨床応用)

<備 考>

- ・苦寒の性質が強いので、肝腎陰虚でも熱象がないときには使用すべきでない。

(漢薬の臨床応用)

<処方例>

- ・苦参湯 (金匱要略・百合孤感陰陽毒)：苦参 (煎液外用)
- ・三物黄芩湯 (金匱要略・婦人産後)：黄芩・苦参・地黄
- ・消風散 (外科正宗・疥癩論)：荆芥・防風・当帰・地黄・苦参・蒼朮・蝉退・胡麻・牛蒡子・知母・石膏・甘草・木通

P-33

角質細胞間脂質(セラミド・コレステロール)合成に及ぼす生薬エキスの影響

富山医科薬科大学・医学部・皮膚科学教室

○荒井哲也, 関谷幸治, 関 太輔, 諸橋正昭

【目的】近年, 角質細胞間脂質, 特にセラミドが角質層の機能にとって重要であり, 角質中のセラミドの低下は皮膚のバリア機能及び保水能の低下につながる事が報告されている。また, アトピー性皮膚炎患者の皮膚ではセラミド量が健常人に比べて減少していることが報告されている。これに対して合成あるいは天然セラミドを直接外用する方法も試みられているがまだ十分な結果が得られていない。そこで, 間接的に表皮内においてセラミドの合成能を高める生薬エキスのスクリーニングを行った。また, セラミドとともに保湿機能に影響を及ぼす細胞間脂質であるコレステロールについても比較を行った。

【方法】ヒト皮膚角化細胞を培養し(submerged culture法), confluent になった状態で分化促進用の培地に交換するとともに, ^{14}C でラベルした酢酸及び各種生薬を添加した。生薬エキスは芍薬, 地黄, 当帰, 苦参, ヨクイニン, 甘草, 黄連の熱水抽出エキスを用い, 分化用の培地に最終濃度0.1w/v%になるよう添加した。ポジティブコントロールにはビタミンD₃(和光純薬株)を用いた。定量は, ^{14}C を取り込んだセラミド及びコレステロールをTLCおよびdensitometerを用いて分析・測定することによって行った。

【結果】甘草, 苦参, 当帰, ヨクイニンはコントロールと比較して有意に($P < 0.01 \sim 0.05$)セラミドの合成を亢進した。甘草, 当帰, ヨクイニンはコントロールと比較して有意に($P < 0.01 \sim 0.05$)コレステロールの合成を亢進した。一方, 黄連は, セラミド及びコレステロールの生合成量を有意に($P < 0.01$)抑制した。

【考察】甘草, 苦参, 当帰, ヨクイニンの各エキスは表皮細胞においてセラミドの合成を促進することが確認され, アトピー性皮膚炎や老人性乾皮症への臨床応用が考えられた。また, 生薬を用いた入浴療法がアトピー性皮膚炎の治療補助効果を示すこと及び, 地黄, 当帰を用いた入浴療法では角質水分保持能の改善がみられることは既に我々が報告しており, これらの作用機序に生薬による表皮脂質合成促進作用が関与している可能性が示唆された。

A-11

アトピー性皮膚炎に対する弁証に基づいた漢方浴剤の使用経験

○長瀬 千秋

兵庫県立尼崎病院東洋医学科

【目的】

アトピー性皮膚炎に対する、漢方浴剤の治療経験はこれまで2~3あった。しかし、弁証に基づいた使い分けの報告はなかった。今回、熱証と寒証で浴剤を変えて使用して、良い結果が得られたので報告する。

【方法】

熱証のアトピー性皮膚炎に対しては、黄芩3g、苦参3g、枇杷葉10gの三味を2リットルから1リットルに煎じて、浴槽に入れさせ、毎日使用させた。寒証のアトピー性皮膚炎に対しては、当帰3g、生地黄3g、枇杷葉10g、艾葉3gの四味を2リットルから11リットルに煎じて、浴槽に入れさせ、毎日使用させた。いずれも漢方薬の内服は弁証に応じて使用した。ステロイド剤以外の外用剤や、抗アレルギー剤も場合によって使用した。対象はあらゆる年齢層のアトピー性皮膚炎の患者で、熱証10例、寒証5例であった。弁証は主に舌診によった。

【結果】

90%の症例で、痒みを止める効果があった。副作用は認められなかった。弁証を間違えて使用した例で、1例ほど患者が中止した。熱証に寒証用の浴剤を使用したケースであった。熱証用浴剤も寒証用浴剤も、患者の皮膚に湿潤性を与え、とくに後者が、皮膚に潤いを与え、喜ばれた。

【考察】

漢方薬の外用にも、弁証が必要であることが解った。浴剤についても例外ではない。漢方の外用薬でアトピー性皮膚炎に対するものとして、紫雲膏と太乙膏が知られているが、前者は寒証に適し、後者は熱証に適するようである。漢方薬浴剤もこれと同様で、熱証と寒証で、分けて使用しなければならない。

痒みに効く生薬について～（『アトピー性皮膚炎の漢方治療』より）

○地膚子・白鮮皮・蒺藜子——去風止痒

地膚子と白鮮皮の組み合わせは皮膚搔痒の症状に使用することが多く、また地膚子の利水作用は体内の水湿を取り除くことができる、白鮮皮の清熱解毒作用は、皮膚のジクジク状態と赤味を治療する。蒺藜子は去風作用が優れていると同時に、気血の運行を通じさせる。 <北京中医薬大学医師 菅沼栄(胡栄)>

○痒みを止める生薬には、去風止痒の蝉退・牛蒡子・蒺藜子・荆芥・防風や、清熱利湿止痒の白鮮皮・地膚子・苦参、また養血去風止痒の何首烏・川芎などいろいろある。

・特に白鮮皮・地膚子・苦参は強い痒み止めの作用をもっている。

北京中医薬大学の皮膚科教授の金起鳳先生は、治療の場合は必ず弁証の上にこの三味を使っている。先生の話によると、上半身の痒みの場合は白鮮皮、下半身の痒みの場合は地膚子、痒みがひどい、また痒みが全身にわたる場合は、両者を一緒に使うとよいとのこと。もし胃が丈夫なら、苦参を加えることも勧めている。私（高橋楊子先生）の臨床経験によれば、皮膚の痒みがひどく、舌苔があれば、両者または三者一緒に使用したほうが効果的である（ただし乳児や胃が弱い人には苦参を慎重に用いる）。

・慢性的で頑固な痒みの場合はさらに虫類の去風止痒の薬、例えば全蠍・白僵蚕・烏梢蛇・白花蛇などを加えたほうがよい。

・金銀花・連翹は疎風清熱・涼血解毒の作用が強いので、中国では皮膚科の紅腫痒痛の治療要薬としてよく使われる。

<元上海中医薬大学講師 在日中医師 高橋 楊子(楊敏)>

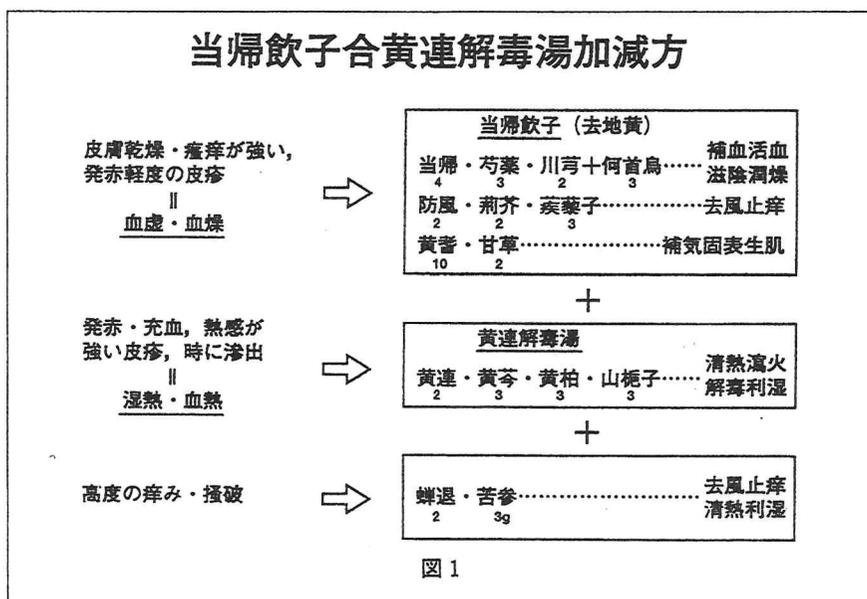
○苦参は止痒の作用にすぐれるので、湿熱の痒みには奏功する。しかし、清熱利湿薬は燥性が強いので脾虚の人には、脾陽を損傷する恐れがあるので慎重に用いなければならぬ。白鮮皮・地膚子も止痒の効果にすぐれる。止痒の強さは苦参に劣るが、薬性はやや穏やかなので、アトピー性皮膚炎にはむしろ使いやすいように感じている。 <平馬医院 平馬直樹>

○アトピー性皮膚炎に対する当帰飲子合黄連解毒湯加減の臨床効果

当帰飲子は皮膚が乾燥し、掻痒感が強い血虚・血燥に用いて養血潤燥去風の効能があるが、清熱作用は弱い。日常臨床でみるアトピー性皮膚炎患者で、皮膚の発赤、炎症性充血、浮腫性紅斑、紅い丘疹、患部の熱感・ほてり、時に滲出液などの熱証（湿熱・血熱）とそれに伴う不安焦燥感、不眠などの黄連解毒湯証呈することが多い。

そこで、当帰飲子を基本とし、黄連解毒湯を合方して清熱瀉火解毒をはかりつつ、強い痒みに対して蝉退・苦参を加味して止痒効果を強めた。さらに黄耆を増量し、補脾肺気・益気固表を通して皮膚バリアー機能の改善を期待した。なお、地黄は時に悪化例が経験されたため基本方から去ることとした。

<山内浩・国府正英・石河亜紀子・石井裕正>



～注意～

- ・去風は皮膚掻痒感の治療に最も使用される治療方法であるが、去風薬は発散力が強いので、慢性より急性皮膚疾患に使いやすい。また、風は陽邪であるので、辛温の去風薬よりも、桑葉・菊花・金銀花・連翹・薄荷などの辛涼の去風薬を用いるほうがよい。

<元上海中医薬大学講師 在日中医師 高橋 楊子(楊敏)>

～皮膚疾患用浴剤について～（京都・壇上医院・壇上先生より）

- ・ 苦参・紫根・大黄・蛇床子・地膚子・山帰来 各 10g

- ・ 地黄(15g)・芍薬(15)・当帰(10)・黄柏(10)・連翹(10)・菊花(15)・甘草(10)
 - * 甘草は入れなくても可
 - * 加味薬として
 - ・ 艾葉
 - ・ 苦参——ジクジクタイプに

- ・ 地黄(20g)・当帰(10)・芍薬(5)・黄柏(10)・艾葉(10) * 乳児・幼児・学童等

参考文献

- ・ 『第十三改正日本薬局方解説書』、日本薬局方解説書編集委員会、廣川書店
- ・ 『和漢薬百科図鑑』、難波恒雄著、保育社(1993)
- ・ 『中薬大辞典』、上海科学技術社、小学館(1985)
- ・ 『漢薬の臨床応用』、神戸中医学研究会、医歯薬出版(1981)
- ・ ウチダの和漢薬情報、生薬の玉手箱 (No. 41)
- ・ 『アトピー性皮膚炎の漢方治療』、中医臨床シリーズ、東洋学術出版社(1996)

14. アトピー性皮膚炎に対する銀花丹皮湯の治療経験

刈谷市・広瀬クリニック 広瀬 滋之

はじめに

銀花丹皮湯は程運乾編の『中医皮膚病学簡編』（陝西人民出版社）の慢性湿疹の治療方として載っている。処方内容は金銀花、牡丹皮、蟬退、黄柏、茯苓、白癬皮、山梔子で病態に応じ加減法が記載されている。

今回、当院を訪れた比較的重症のアトピー性皮膚炎に本方を投与して治験を得たので報告する。

対象と方法

1997年10月から1998年6月の間に当院を訪れた80人（男37人・女43人）の中等症から重症のアトピー性皮膚炎を対象に本方を投与した。

対象患者の平均年齢は26.8±8.71歳（男：27.51±9.94歳）（女：26.14±7.80歳）、平均投与期間は4.24±91ヵ月（男：4.35±1.98ヵ月）（女：4.14±1.82ヵ月）であった。

結果

本方の投与により、以下の効用が確認された。

1. ステロイド使用中止によるリバウンド現象や黄色ブドウ球菌による皮膚感染などの比較的重症例にはステロイド外用剤との併用により、短期間の速やかな効果が認められた。
2. 石膏剤で治療しても、なかなか反応しない例に効果が認められた。
3. 皮膚の炎症の強い例には有効だが、弱い例には効果が認められなかった。
4. 結節痒疹型には治療に難渋した。
5. 本方に滋潤剤を併用することにより、長期間のコントロールが良好となった。

今回、重症例を中心とした数例を呈示し、本方の効用について若干の考察を述べてみたい。